



てらくちまほ

在米22年。かつては人間の専門家を目指し文化人類学を専攻。2001年からキャリアを変え、子供の頃からの夢であった「犬の専門家」に転身。地元のアニマル・シェルターでアダプション・カウンセリングやトレーニングに関わり、個人ではDoggie Project (www.doggieproject.com) というビジネスを設立。犬のトレーニングや問題行動解決サービスを提供しつつ、13歳になるピットブル、ジュリエットとニュージャーニーで楽しく生活中。ご意見・ご感想は：info@doggieproject.com

マイケル・ヴィック事件

今回は、NFLのスーパースター、マイケル・ヴィックが違法に行っていた闘犬ビジネスで、闘犬として育てられた犬たち(主にピットブル)のお話です。バージニア州のニューポート・ニューズという町の決して裕福でない家庭で生まれ育ったヴィックは、いわゆる「アメリカ成功物語」の見本のような人生を歩んでいました。大学在学中にドラフトされてプロ入り。2004年には同年の最高報酬額でアトランタ・ファルコンズと10年契約を結び、その後も数々の大手企業のスポンサーを獲得して行きました。そんな人生を大きく変えたのが07年、ヴィックが違法である闘犬ギャンブルを運営していたことが発覚し、逮捕された事件でした。闘犬ビジネスのパートナーだった従兄の大馬所持容疑による逮捕をきっかけに彼らの闘犬ビジネスが一気に表沙汰となり、「ヴィ

ック犬」と呼ばれる闘犬用の犬たちに対する非情で残酷な行為は、アメリカのスポーツファンや動物愛護関係者のみならず世界中の人々に大きな衝撃を与えたのでした。

The Lost Dogs

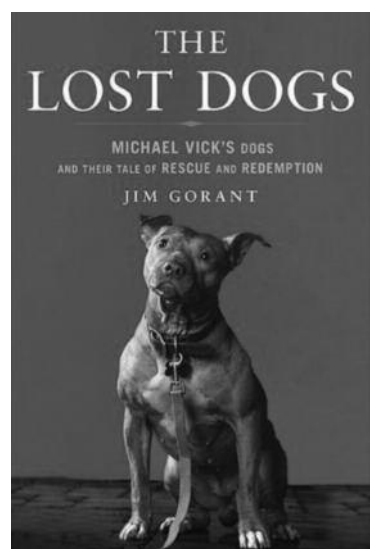
ヴィックたちが経営していた「The Bad Newz Kennel」から生きて保護された犬は51匹。そのうち、瀕死状態だった1匹は安楽死させられ、凶暴すぎてリハビリが不可能と診断された1匹も安楽死となりました。そのほかにも犬の死骸が複数発見され、検死解剖の結果、これらの犬は銃殺、絞殺、撲殺されていたことが分かりました。つまり、闘いに敗れた犬たちを、文字通り「負け犬」として、残虐に処刑していたのです。

この一連の事件を数年に渡り追っていた、雑誌「Sports Illustrated」の元記者ジム・コラント氏は昨年、『The Lost Dogs』というタイトルの本を出版し、ベストセラーとなりました。ヴィック

たちによる闘犬ビジネスの惨い事実や一連の裁判の流れのほかにも、発見され

た犬たちの様子が細かく記録されているのですが、この本の素晴らしいところは、ヴィックたちの下で地獄を味わった犬たちが保護された後のリハビリの過程と、それぞれの犬たちの新しいスタートに焦点が置かれていることです。

実は、闘犬用の犬たちが第2の「犬生」を与えられることは大変めずらしいのです。闘犬用として育てられたピットブルは危険すぎて社会復帰は望めないという考えが定着しているため、闘犬ビジネスへの手入力で保護された犬たちは、今まではほとんど安楽死させられ、保護されても彼らには未来がありませんでした。しかし、この時はヴィック犬たちに未来へのチャンスが与えられ、一匹一匹について社会復帰の可能性があるかどうか慎重に診断されました。「問題は、犬ではなく扱う人間にある」という考えが初めて適用されたのです。当初は半数以上が、人間を恐れて殻に閉じこもっていたヴィック犬ですが、様々な施設でリハビリを受け、家族に引き取られたり、保護センターで幸せに暮らしています。



再スタートを切ったヴィック犬の中には、認定を受けて現在、セラピードッグとして活躍している犬も数匹いますが、いまだに偏見により活躍の場を失ってしまう犬もいます。「ジョニー・ジャスティス」という名前のピットブルは、音読障害のある子供たちの横で静かに彼らの声を聞き自信をつけてあげるといふプログラムで働いていました。地域の図書館から「ピットブル立ち入り禁止令」が出て、行き場を失ってしまいました。残念ながらも、セラピー犬の認定書を持つ十分実績のある犬でさえも、ピットブルというだけで不公平な扱いを受けているのです。

ピットブルの犬生はこれから先もまだまだ「イバラの道」が続くようです。そんな彼らのメージ回復のために、次回も話を続けます。